時代からはずれたひと、道場親信について

酒井隆史 SAKAI Takashi

わたしと道場親信君についての最初に想起する場面は、大学の大教室の壇上でなにかスピーチをしているかれの姿で、そのイベントの趣旨も内容もすっかり忘れてしまったのですが、そのときのかっこうだけが、強烈に印象に残っています。まるで下宿の寝起きそのままのごとき姿で、どてらを着ていたのです。おそらく冬だったのでしょうが、わたしが大学二年だったので、かれがまだ一年だったのではないかとおもいます。そのかれの姿は、その黒縁のメガネ（これは記憶の捏造かもしれませんが）と骨張った顔などの印象ともあいまって、まるでそこだけ「戦後の大学」なるものの、そのほのぐらい過去に通じる穴がぽっかりあいたような印象となりました。のちに1950年代の研究に没頭することになるのをみて、あのときのもやっと感じたものがその時代と重なって、より輪郭を帯びて想起されるようになりました。要するに、道場親信とは、時の隙間から飛び出てきたような、いわば「時代からはずれた」ひとでした。

わたしたちは1980年代の後半、まさにバブル期とともに大学時代をすごすことになったわけですが、いまと比較すれば別世界の感もあるほどには「自由」であった大学のキャンパスには、決してバブル一色であったわけではなく、さまざまな地層が混在して、それがまたキャンパスの混沌とした活気をつくっていたようにおもいます。そこには1960年代後半から紆余曲折をへていながら、さまざまな課題をもつ無党派の諸潮流（諸戦線）が、さまざまなサークルとも横断しながら、ゆるやかでありつつ、それなりの密度をもって活動をくり広げていました。道場君とわたしもその周縁で出逢い、それからも、いくつかの活動を通じて交流を深めることになります。

道場君は、その一端にあって、なにごとにも慎重でした。かれは一見、確固とした基準をもっているようにみえ、人間関係や切迫した心情に流されることはないようにもみえました。ある種の若気ともいうべき「ハネる」ことに対する反発や、むこうみずな行動主義には批判的でした。かれはいったん決意して、やるとなったら、その行動は最後まで責任をもって貫徹させましたが、こうした、学生運動への距離感は、その後の研究においても、かれの仕事を特徴づける傾向だったとおもいます。かれは、しかし、ミニコミや機関誌、ビラの作成となると、実務家ぶりをみせ、創作への情熱を燃やし、レイアウト、割付を引き受け、みごとに定着させていきました。ワープロの黎明期であるその時期、わたしたちの下手なレイアウト、いい加減な版下づくりをみるや、即座に却下して、すべて一から作成しなおし、手書きのタイトル文字を配し、みごとなレイアウトで、あとは印刷だけ、というかたちにするのです。おそらく、ガリ版の時代であれば、かれの能力はもっと発揮できたでしょう。まさに、かれの遺著となった『下丸子文化集団とその時代』（みすず書房、

2016年10月刊）の登場人物であっても、まったくおかしくないのです。かれがあの時代に惹かれたのには、こういう資質上の理由も与っているようにおもいます。この本には、登場人物たちと、ときに一緒になってビラをまき、ピケをはり、機関誌を作成し、唄い、そして夜を通して議論したであろう、まるでたくさんの道場親信がいるようです。道場親信が、この時代に生きていたら、みずから詩を書くというより、ガリ版を持ち歩き、ガリ切りやレイアウト、製本、ビラづくりの名人として、さまざまな名前をもち、かれの文字はあちらこちらの印刷物を飾ったでしょう。だれかがよい歌をつくれば、かれはすぐにそれを、だれもがみやすいかたちに印刷して、それをだれもが歌えるようにしたでしょう。

道場君の好んでくり返す言葉に「精神のリレー」があります。みずからの領域を固めてからの研究者としての道場親信の全作業が、この実践についやされました。その厖大な資料を駆使した記述に一貫してあるのは、戦後を生きたひとたち、知識人から学生、労働者や主婦、市井のひとたちすべてをとらえたある情熱です。つまり、実際に身体を動かすなかで、「この戦争への反対」から「すべての戦争へ反対」へと世界を拡大したり、漠然とした「戦争反対」の意識から「この戦争に反対」するなかで、この世界にひそむ多様な不正にひとが気づき、行動を深化させ、連帯を拡げていく、そのような振幅運動をもったラディカルな脈動です。道場親信は、日本の戦後の運動のうちに、この動きをみて、それを戦後の核心と考えていました。この本は、その動きへの反動が運動のなかからも生じている同時代の趨勢に深い憂慮を示していますが、そのこともこの埋もれつつある脈動の発掘を駆り立てたのだとおもいます。そしてこのように、人が行動のなかでラディカルに支配的価値観や世界を問い返すという姿勢への反動というべき趨勢は、運動のなかからも、ここ数年、ますます大きくなっています。

東京でかれと近しいひとならば、古本屋の店先で熱心に棚をのぞいている道場君の姿に、いくども出くわしているのではないか、とおもいます。かくも本を愛したひとをわたしは知りませんし、探している本を告げると魔術のように現物を取りだして、悔しいおもいをさせる人間が、わたしのまわりにはいなくなりました。こうした長年をかけて収集された貴重な文献資料も大変なものでしょうし、おそらくこれから持ち主によって読まれるべく待っているものもたくさんあるとおもいます。道場親信は、まさしく「これから」のひとであって、これから主著を書くべきひとでした。こうして、かれにしかできないことが厖大に残されてしまったのです。率直にいうならば、いまだ可能性を抱えたままの十分に若い近しい者を失うことに、いまだに哀しみと悔しさをおぼえてやみません。

道半ばにして斃れた若きコミュニストについての文章を書きながら泣いてしまうような、きびしいけれどもやさしいひとでした。そして、忘れてはいけませんが、なんどスベろうが、いつもなにかおもしろいことをいおうという姿勢をくずさない、油断ならない奇妙な軽さがありました。それは、失敗や愚かさもふんだんにはらんだ、「国家のいうがままにならない」（かれの好んだ鶴見俊輔の言葉です）人々の織り成す歴史の熱情を理解するための、人格的素地をなしていたとおもいます。

かれは多くの課題を残して去っていきました。わたしたちにバトンが手渡されました。ただ、わたしにもついやされたであろう、そのバトンをまえに、いまは途方に暮れるばかりです。

――――――――――［さかい　たかし・大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授］